

「お願いしまーす」

ビル風の吹くオフィス街。通り過ぎる人々は皆足早でクーポン入りのポケットティッシュなどに興味はなさそうだ。適当な角度で差し出した右手は邪魔そうに避けられることのほうが多い。

サンプリングは朝八時から始まり、現在は午後一時。残り時間とノルマまでの残数を思い浮かべてため息をついた。今日は早上がりは難しそうだ。

「ねえサワ、そっちあと何個？」

「さつきも聞いてきたじゃん。そんなすぐに減らないよ。あと七十個くらい」

悲しそうでも嬉しそうでもない表情でそう、と呟いてポチは持ち場へ戻っていった。ポチ、というのはもちろんあだ名で本名は「大山」という。犬だからポチ、安直なネーミングだ。しかし百五十センチ足らずの身長とおどどした話し方、それなのに妙に人懐こい態度には「ポチ」という呼び名が似合っていた。会社から支給された派手な赤色のジャンパーがポチの体には合っていないくにおさがりを着せられた子どもみたいだった。

「その束あとのくらいで終わりそう？」

現場ディレクター、多分タカハシさん、から声をかけられる。

「お昼時人増えそうなんで一時間くらいで終わりそうですわね」

「オツケーありがとう。じゃあ箱の中に補充しとくわ。よろしく〜」

流れるように返事・お礼・業務連絡・社交辞令を述べ、そのまま他のバイトのところへ残数を確認しに行った。

ビラ配りでもヒーローショーでも音楽ライブでも、現

場ディレクターは大抵バイトのスタッフのことを人間として見ていない。そういうと聞こえが悪いが、決して殴ったり詰ったりというような「非人間的」な扱いをするわけではない。ロボットや奴隷というよりも備品のようない扱い、というほうが近い。

みんなで使うものだから丁寧に扱う。交換したり補充したりするのにお金がかかるから丁寧に扱う。

だから私たちも備品として振舞う。言われたことをする。言われたこと以上のことはしない。備品が判断をしたり裁量をもったりするのはナンセンスだからだ。

指示以下でも指示以上でもなく指示通り。ブラックコーヒーを飲みたいと思ってコーヒーメーカーのボタンを押すとホイップの乗ったハニーキャラメルラテが出てきて、マシンが「お疲れだと思ったので蜂蜜を使った甘いドリンクにしておきました！」などと喋り出したらぶっ壊してやりたくなるでしょう。

それでいうとポチはコーヒーをつくるうとして白湯を出してしまうコーヒーメーカーだった。ビラ配りでは通行人に差し出すタイミングが悪くて全然受け取られず、子供向けのイベントでは小学生男子にナメられて指示が通らず、検品のバイトでは

そういう要領の悪さとか不器用さは一緒にバイトをしている時は腹が立つことも多いし、休憩中に数人で雑談していて空気の読めない発言をするところも冷や冷やする。

でも一対一で接する時はそういう不躰さが気楽でもあって、友達としては嫌いじゃなかった。

ポチと私は登録制の派遣のバイトで知り合った。同じ派遣会社の所属にしているため、同じ現場に入ることが多かった。最初の印象はちっちゃくて変な奴。そして実

際に変な奴だった。

初めて同じ現場に入った日の仕事終わり、その日のスタッフの中で私とポチだけが西武線に乗り換えることになって、初めて二人で話した。話してみると家が近いこと、お互い大学を出てフリーターをしていること、同じ年なことが分かった。

「え！ サワの家ロフトあるの！」

「便利かなと思つてロフト付きの部屋にしたけど、物置いても取るのがめんどくさいし、夏は暑いし。今度住むときはロフトは避けたいね」

「私ロフトめっちゃ好き！ 押し入れみたいでドラえもんみたいな気分になる！」

部屋にロフトがあるという点にポチは異様に食いついてきて、「サワの家行きたい！」とまで言い出した時はやっぱこいつめっちゃくちや変な奴だなと改めて思った。

「いやでも掃除してなくてすごい散らかってるから」

「私全然気にしないよ〜」

そういう問題じゃないんだよな、と思いつつも何だかどうでもよくなって「汚くてもいいなら」と返事をしてしまった。

二人で私の最寄り駅で降りて、家へ向かう途中なんでもこんなことしてるんだろ、という気持ちに何度もなつた。

「どうぞ、汚いとこだけ」と定型文を述べて部屋に案内すると、ポチは「ほんとに汚いねー！」と定石から外れた返しをした。

それ以来、ポチはよくうちに遊びに来たがるようになって、家が近いから私もポチの家に行くようになった。

私もポチも友達が全然いなくてバイトの無い時間を持て余していた。私は汚い部屋を見て「全然汚くないじゃ

ん〜」というテンプレートをなぞつてしまうので、「ほんとに汚いね！」といつてしまえるポチと一緒にいると、テンプレの外側の部分が埋まっていく感じがしていた。

*

「休憩いただきまーす」

やること少ないし、暇だし、仕事量に対してスタッフ多いし、この現場当たりだなと思いつながら休憩室へ向かう。企業イベントの受付だから座つてられるし、お弁当も支給されるし。

「こちゃこちゃと備品が並べられた休憩室のテーブルで幕の内弁当を広げる。」

「お疲れ様です」

鮭をつついてしているとガチャリと扉が開いて、ナナコさんが入ってきた。

ナナコさんは私とポチの一つ上で二十四歳だけど、妙に貫禄があるのでみんなから「ナナコさん」と呼ばれている。本人が名字で呼ばれることを嫌がるからでもある。

彼女は休憩時間によく本を読んでいて、自分のことをあまり話さない。あとしっかりと食事を摂っているところをほとんど見たことがない。睫毛が長くて目がくりつとしているのに、野暮つたい眼鏡をかけているせいで顔だちの印象が薄い人だった。

出勤や休憩の時間もきっちり守るし、仕事もてきぱきこなすので社員さんからは評判が良かったが、お世辞にも愛想がいいとはいえないせいか一部の学生バイトからは怖がられていた。

今日も支給されたお弁当には手を付けず、文庫本に目をやりながらプロテインバーを齧っている。

「ナナコさん、お腹空かないんですか」

「あまり食べる気分じゃなくて」

気分じゃなくて、と言うけどあなたいつも食べてないじゃない、という言葉は飲みこんだ。

「あの、今日の現場終わりにポチ、あ、犬山と犬山の家で鍋するんですけど」

文庫本から顔を上げ、こちらに視線をくれる。

「よかったらナナコさんも来ませんか」

普段人のことを誘ったりしないのに、なぜかこんな言葉が口について出ていた。休憩室ではよく喋るし、同僚の中では仲が良いほうだけど、仕事以外で会ったことはないのに。

彼女の年齢以上に大人びた雰囲気は淋しげな顔をしているからだと思う。それも孤独というより孤高といったほうが近く、一人でいる姿が完成形みたいな人だ。

私の急な誘いに対するナナコさんの返事は「ありがとう、でも今日は予定があるの。また誘って」だった。きゅつと細められた目は微笑んでいるように見えた。

私にはそれが社交辞令なのか、本当にまた誘ったら来てくれるのか分からなかったけど、「分かりました。またぜひ」と真似をして目を細めた。

ナナコさんの視線は文庫本の中に戻っていった。

*

「あつっ！ 蓋あつっ！」

「だから鍋掴み使いついていったじゃん」

秋口の、また鍋をするにはちよつと早いだろうという時期の鍋パーティーは結局ナナコさん抜きで行われた。素手で鍋の蓋を掴んだポチが騒いでいる。

「あつ！ めちゃくちゃお湯が跳ねる！」
「じゃあ服着なよ」

ポチは家のなかですぐに服を脱ぐ癖があつて、私がいようがお構いなしだ。今日も下はボクサーショーツ、上はキャミソールという極めて裸体に近い格好で鍋を調理している。装飾の無い布に包まれた凹凸の小さい薄い体は少女というより少年みたいだった。

「今日ナナコさんも誘つたんだよね。予定あるつて断られたんだけど」

まだ割高な白菜に箸を伸ばす。

「また誘つて、つて言われたけどあの人の言うことつてどこまでまつすぐ受け取つていいのかよく分かんない」

勝手知つたる他人の家の冷蔵庫でポン酢を探しながら会話を続ける。

「拒絶はしないけど向こうから近づいてくることもない、みたいな」

ああ、あつたとポン酢をもつてテーブルに向かう。

「好きなの？」

それまで黙つていたポチが唐突に口を開いた。視線はレンジの上の豆腐に注がれている。

「うーんまあ仲良くなつてみたいとは思つよ。美人だし」

ポチの方を見ないまま答える。

「いや嘘。なんかナナコさんつて手ごたえが無いのよ」

ポチからの視線を見なかつたことにするには、鍋から立つ湯気は遮蔽物として頼りなかつた。

「休憩とか帰り道で喋つてくれるし、こっちから話せば相談とかも乗つてくれるし、話しかけたらにこにこしてるし」

冷ますために取り分けた豆腐がもう食べられるくらいの温度になつていた。

「でもなんかこっちから話しかけなかつたら、もう二度と話せない気もする。一生」

キッチンの換気扇の音がゴウツとやけに大きく聞こえた。ポチはおもむろに立ち上がったかと思うと、冷蔵庫からマヨネーズを取り出し私の前にドンと置いた。

「かけてみ。意外と鍋に合う」

とてもかける気にはならなくて、マヨネーズをただじつと見る。

「とりあえず」

ポチは私の前に置いたマヨネーズをつかみ取り、自分の取り皿にぶちゅつとかけた。

「ナナコさん呼んで今度タコ焼きしよう。タコパだ、タコパ」

私はすっかり冷めた豆腐に箸を伸ばす。マヨネーズは、かけない。

*

「はい、十四時から一時間でお願ひします」

添い寝コース六十分九千円。千円以上の金額を見るとすぐに時給換算してしまふ自分がいる。

「ずーっと死にたいつて思つてるんです、あたし」

スプリングコートを脱いでミニワンピースだけになったミクちゃんはベッドの上に寝そべっている。私はベッドサイドの小さな椅子に腰かけてそれを見ていた。

「脳みその幸せを感じる大切なトコが上手く動いてないんだと思ふんです」

ミクちゃんはレズ風俗の女の子だ。自身の恋愛対象は男の子だけど彼氏が怒るから、という理由でこのお店を選んだという。

本当は彼氏の話なんて絶対に客にしてはいけないものだけど、指名し始めて半年と少しの頃に彼女が突然「あたし彼氏いるんだ」と切り出した。それに「ふうん」と返してからミクちゃんは時々自分のことを話すようになった。

彼氏が冷たい、当欠して怒られた、ずーっと耳を舐めてくる客がいてサイアクだった、大学の単位がやばい。どこまでが嘘でどこまでが本当か分からないけど、生活の断片らしきものを覗かせてくれた。

女の子と喋りたいだけなら風俗じゃなくても他に色々方法はある。女性向けのレンタル彼女も試してみた。でもレンタル彼女の女の子たちはあまりにも「彼女」を演じてくれる。存在しないはずの関係性の土台を無理に生み出して、存在していることにしようとしてくれる。

それはお金が無くて買えないものがたくさんある私たちが、売り買いできない唯一のものにまで手を出してしまつた感触がして駄目だった。それならせめて救えられないものを買おうと思つた。でも結局時間を買つて、その中で人工的な関係を一から作ろうとするのは、出来上がった関係性を買うのと何が違うのだろう。そういう疑問から目を背けて約九時間分の時給を月に一、二度差し出してた。

「死にたいつてどんな感覚なの」

「あたしが存在した事実とかみんなのなかのあたしの記憶とかが全部まるごと消えちゃえばいいのになつて感じ」

ミクちゃんはベッドの上で体育座りしてそう答えた。色が白いせいで脛にある治りかけの青あざが目立っていた。

長い間、私にとつての生死はもつと些細なもので着心地の悪い服を脱ぎたい、眩しすぎる電灯を消したいとい

うような羽虫くらいの違和感だった。

でもミクちゃんはそんなことに興味はないだろうから、「ミクちゃんが死んじゃったら私悲しいよ」とだけ返しおいた。

「ありがとう」とはにかんで見せた顔が嘘っぽくてかわいかった。控えめな音でタイマーが鳴って、一間までも少しあるけど早めにミクちゃんを帰した。

一人になったホテルの部屋は二人の時よりもなぜかい狭く感じた。ミクちゃんの本当の名前はなんていうんだろう。

*

今日の現場はポチもナナコさんもない。競馬レースの宣伝イベントは、スタッフのほとんどが会場設営のために来た男性だ。数人だけいる進行と誘導要員の女性は固まるわけでもなく、ぼつぼつと隅の方に立って所在なくイベント開始を待っていた。

「ちよつとそこの子いい？」

簡易ステージが組み上げられていく様をぼーっと立って見ていると、キャップをかぶったディレクターに声をかけられた。

「あつ、俺運んでおきますよ」

するとすかさずADの男性が手を挙げ、ロープやらマイクやらの備品をディレクターから引き受ける。タカハタくん、じゃあよろしく、と言ってキャップを足早に去っていった。

「すみません」

お礼とも謝罪ともとれる言葉をとりあえず発する。ぱちりと一瞬目が合い、会釈だけしてステージ裏へ向

かっていった。初めて見る顔だ。年齢からして新卒で入った社員さんだろうかと予想する。

彼は積極的に動いて仕事を探し、ディレクターが手の空いた人を探していればすぐ飛んでいく。気に入られたいんだろかなというのを見てとれた。

タカハタくんと呼ばれたADはその日一日ハキハキとよく働いていた。必要最小限の仕事量で済ませようとしているスタッフの中で目立つくらいには。

会場設営が早めに終わってから、スタッフのほとんどはバックヤードで配布用のパンフレットを袋に入れる作業をしていた。

ガチャッと扉が開いてタカハタさんが入ってくる。

「表の横断幕かけるのに誰か一人来てもらえますか？」

スタッフたちは各々が自分が今折っているパンフレットに目をやる。それまで顔見知り同士で言葉を交わしていた人たちもぬるりと沈黙し、作業中という空気を漂わせる。十数人が押し込められている部屋に似つかわしくない静寂が不意に訪れた。タカハタさんの呼びかけは誰にもキャッチされることなく壁に当たり、バウンドして床に転がっている。

「あ、じゃあ私行きます」

こういう時に誰も拾わないボールを拾ってしまうのは我ながら損な性分だ。タカハタさんの後をついてバックヤードを出る。背の高い彼の早歩きに小走りですついていく。

「助かります」

「いえ」

ステージ前にかける横断幕は雑に折り畳まれていて、お互いそれを広げる手は止めないままに短い会話を交わした。

「この現場空気悪いつすね」

広がった横断幕の端と端を持って、私とタカハタさんは徐々に後ずさりしていく。丸見えだった鉄パイプで組まれたステージの土台が赤と黄色の布で隠されて、空元気みたいな賑やかさが突如として空間を支配した。ステージ上の大きなガラポンとのぼり旗も取ってつけたような楽しさを演出するのに一役買っていた。

「あは、どうなんですかね」という私のへらへらした返事は、ピンと伸ばした長い長い横断幕の距離の分離れたタカハタさんには聞こえていなかったかもしれない。

*

ない。ない。スクロールしても。ミクちゃんのプロフィールがない。

予約を入れようとミクちゃんが所属しているお店のホームページをいつものように開いた。でもミクちゃんのプロフィールが出てこない。所属数が多くないお店だからこんなに探して見落とすわけがないのに。

何度も何度も更新とスクロールを繰り返す。それどころではないのに、今日の現場の最寄り駅にはついてしまった。一旦スマホを鞆にしまい、何も考えないように努める。

しかし、不運なことに住宅展示場で看板を持って立っておくという仕事は、考え事をするだけの余白がいくらでもあった。

道行く人に看板を見せたいだけなら看板を地面に固定して立てておくだけでいいんじゃないか。わざわざ人を持って立たせておく必要性はどこにあるのか。しかもそれが私である理由はなんなのか。私が持つ看板とポチが持

つ看板とナナコさんが持つ看板の違いは何なのか。

どこで汚したのか分からない土の付いた。パンプスの爪先を見ている。

顔を上げると少し離れたところにいるモデルハウスを見学に来た家族が目に入った。夫婦らしき男女と幼稚園生くらいの男の子。男の子は母親の周りをぐるぐる回りながら走って困らせている。それを父親がひよいと捕まえて抱き上げる。

子どもが嬉しそうにじたばたするたび急に目線が高くなったのが楽しいようできゃあきゃあという甲高い笑い声がこちらまで届く。子どもの靴底が父親のネイビーのカーデイガンに当たるとび白っぽい汚れが増えていくが、彼はそんなことは気に留めていないようだった。

その瞬間「ああミクちゃんはお店を辞めたんだな」ということが分かった。いやホームページを見た時に気づいていたはずだけど、分かったのはこの時だった。

私に何も言わずに辞めちゃったんだ。当然のことだけど。個人的に連絡する手段なんてないし。ミクちゃんの中で変な客でしかない。いやそれもどうか分からない。

ミクちゃんと私は色んな話をしたけれど、その時間は常にお金によって私が買ったものだった。そこで生まれた関係性のようなものは、あくまで関係性のようなものであつて関係性ではない。

お店のホームページから予約して、お金を払うことでしか会えないミクちゃんに何を求めていたんだろう。確かに時間はお金で買っているけど、その時間の中で会話や一緒にいる空間は本物だと思っていた。でもそれは土台となる時間が消えれば、一緒に消えてなくなるものでしかなかったのだ。

「すみません。物件を見に来たんですが迷ってしまっ

て」

先ほどの父親だ。

「少々お待ちください。ただいまご案内できる担当の者をお呼びまいります」

担当の社員を呼びに事務所へ走る。看板は、持ったまま。

*

住宅展示場でのバイトは安心していたら終わったようなものだった。

停止した脳みそとは別に体はルーティンを覚えていて、足は最寄り駅からスーパーへ、スーパーから自宅へと私を運んでいた。

ポチが来るときは色々レシピを見ながら料理を作ってみたりするけれど、一人の時は献立を考えるのが面倒くさくて、同じメニューをローテーションさせている。

鶏ささみを耐熱ボウルに入れ、料理酒を振りかける。ふんわりとラップをかけたところを昨日買ったはずのラップが無いことに気が付いた。ささみを蒸すために買ったのに。スーパーを出た後で買い忘れたことに気づいてわざわざコンビニで買ったのに。なんで。なんで。

シンク下の戸棚、冷蔵庫の横、電子レンジの上、リュックの中、靴箱の上、本棚、どこを探しても見つからない。

積み上げられた服の山を薙ぎ倒すように崩してみても床の見える面積が狭まるだけでサランラップは出てこない。心底腹が立った。むかついた。

絶対にあるはずなのに探しても探しても見つからない

サランラップと、この世界に生きているはずなのに更新しても更新しても見つからないミクちゃんのプロフィール。

「うううううう」と唸ってキッチンに這いつくばる。悔しい。情けない。許せない。私は昨日確かにコンビニで割高なラップを買ったのに。なんでなくなるのよ。

ぎざぎざ、と奥歯に力が入って貴重な水分が目から絞り出される。ダンゴ虫のように体を丸めたり、反対に関節という関節を限界まで延ばしてみたりする。不潔な床に頬を擦り付けることで、自分の不幸に納得する理由を与えようとしていた。落としたまま放置していた玉ねぎの

茶色い皮が髪の毛と触れ合っかかさ音をたてている。頭上に転がされたゴミ袋代わりのスーパーの袋からは生

ごみの匂い。顔中に力を入れて「バカ」「ボケ」などと罵倒を繰り返していると、数週間前に床にべつとりこぼしてそのままにしていた干からびたケチャップと目が合った。

散々自分を卑下して楽になろうとしていたのに、乾ききった調味料と同等というのはなぜか腑に落ちなくて、さつと涙が引いた。

床に投げ出したスマホがヴァーツと震えだす。きつとボチからの着信だろう。空虚なヴァイブレーションがしばらく続き、数コールで鳴り止む。再び鳴り出す。鳴り止む。

それを二度ほど繰り返して、電話は来なくなった。鳴っている時はうるさくてイライラしていたのに、鳴り止んだら諦められたことにむかついていた。

理不尽だと分かっているのに自分の中の苛立ちに振り回されてしまう。一人暮らしでよかったと思うのは、ど

れだけ鋭利な感情を振り回しても誰にも刺さらないこと

だ。

もうそれ以上震えることは無くなったスマホと同様に、冷たい床が私の体温でぬるくなるまでただ床に伏せていた。

*

「何してたの」

久々にポチと現場がかぶった。第一声がこれだ。

「ちよっと体調悪くて」

「そっ」

百均の商品がきちんと数通り納品されているかを調べながら、ポチは機嫌が悪そうだった。連絡を返さなかったことに対してなのか、体調が悪いというあからさまなごまかし方をしたことに対してなのか、はたまた全然関係ないことについてなのかは分からない。

百均のゴムボールはちょうど人の手のひらくらいの柔らかさをしている。休憩になるとポチはいつもみたいに普通に話しかけてきた。

「サワ、クマすごいよ」

私の顔を見たポチはぎょっとしている。

「あんまり寝れなくて」

連絡を無視していたのに心配そうしてくれるポチが健気で、罪悪感が募った。連絡取れなくてごめん、と言うといいよいよと気を遣われた。普段はあんなに遠慮なことばかり言うのに。よっぽど私はひどい顔をしているんだな、と自覚した。

「頼んだら早上がりできるかもよ」と助言してくれたけど、そこまでじゃないからと断って、先に休憩が終わって持ち場に戻るポチを見送った。

すると別の商品の検品をしていたチームが一斉に昼休憩を取りに来たようで、数人の男女がわいわいと話しながら休憩室へ入ってきた。

「お疲れ様です」

「あ、お疲れ様です」

なんとなく居心地が悪くなって休憩室を出る。まだ午後の勤務の開始まで十分ほどあるので、とりあえずトイレへ向かう。狭い個室に入って便器の蓋の上に座り、無機質な白色の扉をただ眺めていた。

ナナコさんをまた誘ってみようかな。でも迷惑かな、と逡巡する。

私がナナコさんのことを考えている時間の何分の一くらいナナコさんは私のことを考えてくれてるんだろうか。比較できないはずの自分と他人の感情を無理やり比較するようなことはしたくないのに、そういうことばかり考えてしまう自分がいる。

「え！ それほんと？」

手洗いの場のほうから声が出て、誰かが入ってきたことに気づく。女性二人の声とカチャカチャ言う音、きつとメイク直しでもしているんだろう、が聞こえてくる。

「だって榎並さんって割と地味なほうじゃない？」

榎並さん、ナナコさんのことだ。

「ほんとにダイレクターと付き合ってるの？」

思わず存在がバレないように息を潜める。結構長いらしいよ、と一人が続けた。

ガチャン、と音を立てて思わず個室を出る。二人の視線がこちらに向いたような気がしたが、構わず廊下へ出た。

なんだ、これ。朝から何も食べていないのに嘔吐して楽になりたいような気分だった。

私はナナコさんと仲良くなりたいたいんじゃないかと、私の頭の中のナナコさんが好きだったんだな。一人で都合よく解釈して、一人で裏切られているのがあまりにも滑稽で乾いた笑いがこぼれる。

もうずっとアルバムで音楽を聴いていないなと思った。サブスクでトップソングだけを拾うのに慣れてしまつて、十数曲を通して一つの作品として何度も聴くようなことをしていない。サブスクにない曲は平気で諦めたりもする。

ナナコさんの顔を思い出そうとしても目以外のパーツがぼんやりしていた。笑顔も、持ち上げられた口角じゃなくて細められた目ばかりを思い出す。文字を追う彼女の黒目の動きは容易に思い起こせるのに、どんな本を読んでいたかは一つも知らない。

*

「サワ、どうしたの？」

午後の勤務で私は、ポチにそう問われるほど商品の個数を数え間違えていた。あまりにも間違えるのでADが怒るところか心配し、半ば強制的に早退させられてしまった。

身体は疲れていないのになぜだか動く気にならない。

窓はこのところもうずっと締め切っていて、ニトリで適当に買った一番安い無地のカーテンは数か月間風に揺らされていらない。窓をびったりと閉め、きちんと鍵をかけていてもまだどこか隙間があるような気がして、目張りするようにサッシの縁をガムテープで囲い、鍵はぐるぐる巻きにした。

そんなことに本気で意味があると思っていたのはせいぜい一週間くらいで。次第にノイローゼ的な行動だった

ことに気づいたが、その時にはもう外すのが億劫になってしまっていた。

カーテンは無地だけどじつと見ていると布地の模様を意識が集中して、一点だけを凝視しているとゆらゆら揺れているようで気持ち悪かった。

読み終わった小説を床に積む。机の上の邪魔なものをざあと床へ払い落とす。財布から抜いたレシートの束が散らばり、一センチくらいだけ残っているポン酢の瓶はごとんと鈍い音を立てて床に落ちた。

折り畳みの白いローテーブル。個人輸入サイトで注文してようやく届いた睡眠剤をいそいそと取り出す。十錠一シート×五。計五十錠。そこから一錠一錠、錠剤を取り出していく。

空気が流れが停滞した室内には人間一人分の鬱憤が充満していた。

「できた」

白いテーブルの上に白い錠剤。五×十列。計五十錠。立ち上がって上から見ると右から二列目の一番上の錠剤がずれていた。「やり直し」。さらさらとテーブルの中心に錠剤を集める。

最近全然シフト入っていないからまずいな、入らなきゃな。ポチからの連絡は返信しないまま。ナナコさんからは当たり前だけど連絡が来ない。ミクちゃんのプロフィールもホームページ上に現れない。

ところどころひしゃげた紙パックの豆乳にストローを差す。がしがじとストローを噛むと、丸い筒状のストローの口は平らになって、狭められたストローから吸い出される豆乳の勢いは激しさを増す。ぺちゃんこになったストローを元に戻そうと歯で色々調節するが元の丸みは戻らなかった。

急にすべての物事が筒状に感ぜられる時があつて、元に戻らないストローも人生みたいだと思った。

ヴーッヴヴッ

ポチから立て続けにメッセージが来ている。

〈だいじょうぶ？〉

〈元気がついたらタコパしようよ〉

〈ナナコさん誘ってさ〉

〈三人で！〉

既読を付けないように全て読む。ごめんね、ポチ。

返信はしないままイヤホンを付けてシャッフル再生を始めるのと、全然気分じゃない曲が流れた。

次の曲、また次の曲、また次の曲。どんどんと次の曲

へ飛ばしてみても聴きたい曲がなくて音楽を聴くのをやめた。イヤホンは耳に無音を注ぎ続ける。